

寵姫に復讐鬼は哭く

師走

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

巖窟王の、幕間の物語（のような物）です。

目次

幕間の物語①

1

幕間の物語①

——嘗て、その男は人間でした。

そう。

嘗て、は。

——フェルナン。

——ダングラール。

——ヴィルフォール。

己を監獄塔シヤド・ニエイフに墜とした、非道そのものである三人の顔面を眺めながら、

エドモン・ダンテスの愉快そうに嗤った。

『ああ——なんて壮観な景色なのだろう。世界中のどんな美しい景色よりも感動する……』

三人は、その男を人間でなくした原因の者達でした。

エドモン・ダンテスから見て右の位置にいる金髪の初老の男性のフェルナンは、恋敵のエドモン・ダンテスが最愛のメルセデスが結婚することを憎らしく思い、虚偽の密告状を提出してエドモン・ダンテスを、結婚式で逮捕させました。

そしてフェルナンの左隣にいるダングラールという男は、船乗りであつたエドモン・ダンテスが出世するのを疎ましく思い、フェルナンに虚偽の密告状を提出するよう唆しました。

そしてそして、そのダングラールの左隣にいるヴィルフォールという男。彼はエドモン・ダンテスが無実であることを知りながらも、自己保身のためにエドモン・ダンテスを犠牲にし、彼を脱獄不可能と言われる牢獄シャトー・ディフに投獄しました。

そう——彼らのせいでエドモン・ダンテスはその地獄と言うべきこの世の悪性を味わうはめになったのです。

エドモン・ダンテスは何と十四年間。十四年間も、この世の地獄、牢獄シャトー・ディフに収監されていたのです。

恩師でもあり義父とも言えるファリア神父が居なければ、恐らく彼は一生牢獄の中に居たでしょう。

あの耐え難い孤独に一生悩まされ、苦しみ——そして何も残さず死んでいく。そんな未来が用意されていたのです。

ですがエドモン・ダンテスは、悪魔のような発想で監獄塔から脱獄しました。エドモン・ダンテスを息子のように想ってくれていたファリア神父の遺体に代わることで、自動的にシャトー・デイフから脱獄することに成功しました。

そしてファリア紳士の遺言に従い、モンテ・クリスト島に隠された有り余るほどの財宝を手にして——今ここに、至ります。

『さあ、先手は打つたぞ——次は、お前達の番だ』

その男は嘲笑います。

ずっと、シャトー・デイフの中で彼らに復讐する未来を希望していた。だから彼は嘲笑うのです。

その姿はまるで悪鬼のようで——いえ、そう呼ぶのも生ぬるい。

彼の悪性は一点にのみ集中しています。

なのできつと、こう呼ぶのがふさわしいのでしよう。

——そう、彼の名は、もはやエドモン・ダンテスでもありません。
その男の真名はきつと、もう既に——

☆

「——巖窟王。もう朝だぞー巖窟王！」

「……………嫌いぞマスター。耳元で大声を出すな」

巖窟王は、極上の柔らかさを誇る椅子の暖かさを感じながら、気怠そうな声で応答した。

怠そうな声を出しているのは、寝ているところを己のマスターである藤丸立香に起こされたからであろう。寝起きで機嫌を損ねているわけではない。人間、意識を覚醒しても、多少は眠気を引きずるものである。まあもつとも、この霊基はすでに人間のものはなく、非人間であるサーヴァントのものなのだが。

「……何か用か、マスター。先程もう朝だと言ったが、俺は書齋で熟睡するほど間抜けではないのだが」

とはいえ、書齋で昼寝をする間抜けではあるのかもしれないが……まあ、本を読んでいる内についての意識が朦朧になる経験は、誰にもあるとは言わないが読書家ならば一度はあるだろう。睡眠の意味がないサーヴァントという存在であるアヴェンジャーがついて寝てしまったのはあくまでそういう雰囲気にならされてしまったからであるが、であればアヴェンジャーは、一人の読書家として先程の前言を撤回したほうがいいのかもしい。そう思った。

立香は、どう答えるべきか悩んでいるふうに「うーん」と顎に手を当てた。

「いや、実はなにか用があったわけじゃあ無いんだよね……ただ、なんとなく巖窟王を起こさなきゃいけない気がして……」

「……………」

立香の微妙な回答を聞いて、巖窟王は眉間に皺を寄せた。

聖杯戦争のマスターは就寝中、己のサーヴァントが歩んだ人生を夢として垣間見ると聞かぬが——まさかそれに似た現象が起こつたというのだろうか。

……なら、この善人な我が共犯者が『何となく起こさなきゃいけない』気持ちになるのも納得いった。

なぜなら巖窟王の過去は——人間の悪意で構成された、惨たらしい復讐劇なのだから。

「……………クハハッ」

「出た。巖窟王のけたたましい笑い声」

「マスター——いや立香よ。聞かぬが、お前は他人を、煉獄よりも劣悪な所に墜としたいと願ったことはあるか？」

巖窟王は、立香と過ごした監獄塔での七日のときのように問う。

「出た。巖窟王のいきなりの質問……いや、そこまではないな。強いていうなら学校のテストで友人に順位を抜かれたとき、『チクショー最下位地獄に落ちちまえ!』と思つたくらいかな?」

「——フツ」

「あつ、鼻で笑つたな!」

立香は少し不機嫌そうにした。

「いやいやすまない。あまりにも我がマスターが、浅いところにいたからな……それでこそ、我が共犯者と言つたところか」

「……それ、褒めてるの?」

「ああ褒めてるとも。まるで、エデのよ——ツ」

巖窟王は、己が最愛の者の名を言いかけた口を塞いだ。

「……失礼したマスター。お前は、お前だ。エデではなかつたな」

「ねえ巖窟王。確かエデって、アヴェンジャーの——いやごめん。何でもない」

追求してはいけない雰囲気を感じ取つてか、立香もアヴェンジャーと同じく口を塞いだ。

「フツ、気に掛ける必要はないマスター。今や俺はお前に仕えるサーヴァント。聞きた

い話があれば聞くがいい」

「……じゃあ一つだけ、気になっていることを」

立花は巖窟王の心内に踏み込むべきか否かを悩みながらも、最終的には覚悟を決めたような顔面をした。

「実はさ、巖窟王と過ごした監獄塔の四日間を過ごしたあとに『モンテ・クリスト伯爵』を読んだんだよ」

「ほお」

自然に口角が上がる感覚を巖窟王は覚えた。

モンテ・クリスト伯爵——つまり、巖窟王の出自である書を読んだということだ。

モンテ・クリスト伯爵とは、アレクサンドル・デュマ・ペールが綴ったある男の復讐劇を描いた書であり——『復讐鬼』の名を世に轟かせ、アヴェンジャーを座に至らせた原因である。

その本を読んだということは、大雑把に言えばアヴェンジャーの人生そのものを視られたと同義だ。過去の行いを見られる。人によればそれは恥辱に塗れたことなのかもしれないが——アヴェンジャーは、己がマスターが自身の出典を見たと聞いて嬉しかった。

もしそれを読んだことが切っ掛けで、人間の悪性の醜さ、愚かさを識ってくれば、こ

れほど嬉しい事はない。

まあとはいえ、あの監獄塔での七日間を正気を保つたまま生き延びた我がマスターの事。恐らくは『エドモン・ダンテス』という巖窟王ではない別人が最終的に至った結果に感動し、『終わりよければ全て良し』という結論を見出したのだろう。

しかしてそれは間違っている結論ではない。だからこそアヴェンジャーは、心底から歓喜に震えることができないのだ。

立香は、続きの言葉を紡ぐ。

「……まあとはいえ、実を言えば小説の翻訳版じゃなくてコミカライズなんだけど、それでも気になったことがあって、『モンテ・クリスト伯爵』のエドモン・ダンテスは苛烈な復讐鬼だったけど、苦悩と後悔から改心にへと至った……言うならば、人間に戻った。愛娘のエデの手によって——」

「ふむ、それで？」

「だけどサーヴァントとして現界したエドモン・ダンテス——いや、『巖窟王』は、監獄塔シャトール・ドイフに十四年間も閉じ込められ、そして恩師のフィリア神父の死を切つ掛けに脱獄した。アヴェンジャーは、その憎悪に満ちていた頃の君に近いと思うんだけど……それって、エデがいらないから、なのかな？」

「……何でって、おいマスター。それを当人の俺に聞くのか？」

巖窟王は深く嘆息した。

「いやまあ、聞くべきことじゃあ無いとは分かっていたけどね」

「せつかくだしこの機に聞こうと思った」ということだろうか？ 確かに、聞きたい話

があれば聞けと言ったとは俺だがな……生憎だが、俺はその回答を用意はできない」

「えつと、言いたくないならいいんだけどね」

「違う、そういうことではない——ただ、それは俺自身も分からないからだ」

「分からない？」

「ああ」

巖窟王は、復讐鬼だ。

それは憎悪と復讐のみの、全てを灰燼と帰すまで荒ぶるアヴェンジャーに他ならぬ。
い。

この世界に寵姫エデはおらず、ならばこの身は永劫の復讐鬼で在り続けるまで——そう在るべきだが、もし巖窟王の隣に最愛のエデがいたとしたら——巖窟王は、巖窟王でなくなるのだろうか。

人間に戻る。

エドモン・ダンテスのように。

……そのような仮定、一度も想像したことがないと言えば嘘になるかもしれないが——あまり、想像したくない仮定である。

なぜなら巖窟王は復讐鬼なのだから。『復讐鬼の偶像』を捨てた巖窟王をなど、それはもう巖窟王の死亡に等しいのだから——考えたくないと感じるのは、普通のことだろう。

いや——これも嘘か。

「……分からない。けど、もしエデに逢えるなら——それは、なんて素晴らしいことだろうか」

その眩きは、自然と漏れ出たものだった。

立香は思案するように手で顎に触れた。

「……そうか、なるほど。巖窟王は、その子がほんとに好きなんだね」

「ああ、愛しているとも。エデ——」

その名を呼ぶだけで、確かな高揚を巖窟王は感じる。

名から感じる暖かみは、まるでかつて監獄塔で哭くように呼んだメルセテスセテスの名のよう——その名を口にする度に、巖窟王の脱獄脱獄の願決意いは煌々と燃え盛ったのだ。

エデ。巖窟王の霊基は、確かにこの名を求めていた。

「そうか、やつぱり——うん、じゃあ頑張んなきゃいけないな！」

立香は何かを決意したように、やる気に満ちた顔面をした。
立香が何を企んでいるか、この時の巖窟王はまだ気づいていなかった。